

ドラの 庭園

ドラは、今 8 歳です。小さなころは、お母さんやお父さんのお手伝いをするのが楽しかったものです。食卓の用意をしたり、食事の後に床をはいたり、明るいほほえみでみんなを幸せにするのが大好きでした。特に、赤ちゃんの弟ダレンは、いっしょに遊んであげたり歌を歌ってあげると喜ぶので、とても楽しかったことを覚えています。みんなはよく、ドラがいて本当に助かるわとか、いっしょにいて楽しいよ、などと 言ってくれました。

けれども 少し大きくなった今では、自分でも どうしてか 分からないけれど、何だか 気むずかしく なってしまったようなのです。ダレンを笑わせても 前みたいに 楽しくないし、最近 は 家のお手伝いをしたり 自分の 後片付けをする 気分にも なれません。ドラは、以前のように 幸せではなく、それが どうしてか 分からずに いるのです。

ある夜の こと、ドラは ベッドに 横になって 泣き始めました。以前のように、やさしくて 明るい 女の子に もどりたいと 思いました。自分の あわれな 状態を なげいていたら、ふと、心の中 で ささやく 声が したような 気が しました。「祈ってごらん！ イエス様は 君を 助けてくれるよ！」

ドラは ベッドの 上に 起き上がって、ランプの 明かりをつきました。部屋には だれも いません。きつと、ただの 想像だったのでしょうか。ドラは 首を かしげながら、まくらに もたれました。

目を 閉じると、またもや 声が しました。「祈ってごらんよ！ イエス様は 答えて くださるから！」

ドラは パツと 起き上がりました。「だれなの？ わたしのこと、からかっているの？」

なぞの 声が 一体 どこから 聞こえてくるのかと 部屋中を 見渡しましたが、何も 変わった ことは ありません。変だなあと 思いながら、ドラは また 横に なりました。(もしかしたら、声の 言った通りに するべきなのかもしれない！ 祈らなくちゃ いけないのかも！)



ドラが一人で祈ったのは、久しぶりのことです。以前は、両親にお休みのキスをした後、ベッドにもぐって親友に話しかけるようにイエス様とお話するのが大好きでした。そんなことはもう、長いことしていません。今になってそれを思うと、イエス様と話している時に感じた、あの心地よさが恋しくなりました。

ドラは急に、だれか話を聞いてくれる人がほしいと感じました。自分のことを心から分かってくれて、わからないことを説明してくれるだれかが……。ドラには最高の友だち、イエス様が必要だったのです。それで、ドラは祈り始めました。

「イエス様、わたしには本当にあなたがが必要です。どうか、わたしがどうしてこんなにみじめな気分なのか、教えてください。そして、イエス様……。」

するとドラは、急に安らぎを感じ、まぶたが重くなってきて、ね入ってしまいました。

まもなくドラは、自分が庭園にいることに気づきました。庭園を囲っている小さなさくはポロポロにくずれかかり、通り道や花だんは雑草だらけです。もう長いこと手入れされていないことは、明らかでした。ドラは、思わずつぶやきました。「どうして、だれもこの庭園の手入れをしないのかしら？」

「それを知りたいのは、わたしのほうよ！」すぐ後ろで、元気な声がしました。ドラは、だれかと思ってぐるっと見回しましたが、だれもいません。反対の方を見ていると、また声がしました。「あなたなら、知ってるはずでしょ……。だってここは、あなたの庭園なんだから！」

ドラはまたもや振り返って、今声の聞こえてきた方を見ましたが、だれも見えません。「だれ？どこにかくれてるの？」

「かくれてないわ。下を見て。あなたの真ん前よ。」

ドラが下を見ると、バラのしげみいっぱいには生えている雑草の中に、淡いピンク色のバラの花がさいているのが、やっとのことで見えました。(でも、まさかバラの花が話すなんて……。?) ドラは花をもっとよく見ようと、しゃがみました。すると、その小さなバラの花は、ほほえみながら真っすぐドラの方を見ていたのです！

「心配ないわ、ドラ。あなたは夢を見ているの。夢の中では、ふつうじゃないことがいろいろと起こるでしょ。」とバラの花が言いました。



ドラは いっしゅん、言葉も 出ませんでした、勇気を ふりしぼって 言いました。「これが 夢ですって？ まるで 現実みたいだわ！」

「夢は、現実を 表していることも あるの。それで、すごく 現実的に 見えるのかも。」と バラが 答えました。

「そうか！」 急に ドラは、さっき バラの 花が、これは 自分の 庭園だから、ちゃんと 手入れしないと いけない、と 言ったことを 思い出しました。それで、バラが そのことを もっと 説明してくれないかなと 思いながら 言いました。「この 庭園は きっと、前は すごく きれいだったんでしょね。」

「ええ！ 本当に きれいだったわ！ 母親たちは 子どもたちを 連れて 来ては ここで 遊ばせ、おじいちゃんや おばあちゃんたちは ベンチに すわって、花だんの 間で 楽しそうに 遊ぶ 子どもたちの 姿を ながめるのが 好きだったの。ミツバチや ハチドリも、花の 甘い みつを 吸うために やって 来たのよ。ちょうちょが ここそこを 飛び回る 姿は、まるで 花そのものが 舞っているようだったわ。花だんには ゼラニウムや ヒナギク、菊や ツツジに、あらゆる 色と 大きさの バラの 花も さいていたのよ。通りかかる 大勢の 人たちが、わたしたち バラが 発散する すばらしい 香りを かいでいった ものだわ。」

「だけど、今は だれも ここに 来たららないの。花は みんな かれちゃった し・・・わたしも じきに かれるわ。」 バラの 花は 悲しそうな 顔を しました。ドラは、花びらから なみだが こぼれるのを見た と思ったほどです。色あせた

花びらは、ますます しおれてきました。

ドラは ぎょっと しました。「かれないで！ お願い！ わたしが あなたを 助けて あげるから！ どうしたら いいのか、教えてちょうだい！」すると、バラは ほっと した 表情で 顔を 上げました。

「まず 最初に、わたしの 周りに 生えている 雑草を ぬいてくれないかしら。雑草は、わたしが 必要な 栄養や 水分を、みんな 地面から 吸い取ってしまうのよ。」と バラが 言いました。

「わかったわ！」 そう 言うと、ドラは 雑草を つかんで、思いっきり グイッと 引っ張りました。けれども、手の 中を見ると、ぬけたのは 葉っぱばかりでした。

「やり方が あるのよ。根元の方を つかんで 引っ張らないと。根っこから 引っこめないと、また 伸びてくるの。」 バラの 花は しんぼう強く 説明しました。

ドラは もう一度 やってみました。今度は 地面近くの 根元を つかんで、力 いっぱい 引っ張りました。すると、大きくて みにくい 雑草が、根っこごと ぬけました。けれども、何かが 変です！ ドラが 地面から 雑草を 引っこめいた 時、いたみを感じたのです。

「いた！」 ドラは さげびました。身を かがめると、次の 雑草を つかんで グイッと 引っ張りました。この 雑草も 根っこから ぬけましたが、ドラは またもや いたみを感じました。

「いたい！」ドラは また さげびました。一息 つくと、今度は 大きな たばに なった 雑草を 両手で がっしりと つかみ、歯を 食いしばって 一生けん命 引っ張ったら、根っこが めけた ひょうしに、後ろに 転んでしまいました。

「いたーい！」ドラは またもや さげびました。バラの 花は、この 様子を ずっと 静かに 見守っていました。ドラは 顔を 上げ、しかめっ面で バラの方を 見ました。（一体 どうなってるの？ 正しい ことを してるんだと 思ってたんだけど？）と 言いたそうな、とまどった 顔です。

バラの 花は、気の毒そうに ドラを 見ました。「正しい ことを するのは、大変な ことも あるっていう ことなのね。庭園の 雑草を めくには 努力が いるし、多少は いたむ こともあるわ。だけど、心配は ご無用よ。手入れた 後の 庭園が どんなに すばらしく、また 美しく なったかを 見たら、そうして よかったって 思うわ。」

ちょうど その時です。雲の 間から 明るい 光が 差ってきて、ドラの 顔を 照らしました。まぶしくて 目を 閉じましたが、また 開けてみると、自分の ベッドの 中に いました。

「起きる 時間よ、おねぼうさん。目覚まし時計が 聞こえなかったようね。朝ご飯が できてるわよ！」お母さんの 陽気な 声です。

学校に いる間、ドラは、庭園や バラの 花と 交わした 会話について、何度も 思い出していました。そして、また 庭園に もどって、ほかの 花たちのためにも 何か してあげたいと 思いました。

でも、どうしたら もどれるでしょうか？ 夢の 中のお話に すぎないのに！ それとも・・・？ すると、夢を 見る 前に 聞いた あの声が、また 聞こえました。

「イエス様に 聞いたら？ きっと、教えてくれるよ！」

（もちろんだわ。そう しようっと!）とドラは 思いました。

その夜の ことです。ドラは いつもより 30 分も 早く ねる 用意をしたので、お母さんは びっくりしました。

「ねる 準備を するのが うれしそうだなんて、めずらしいのね。」お母さんが ドラの 額に キスをして 言いました。

「今日は 早く ねたいのよ、お母さん。お休みなさい！」

「気分でも 悪いの？」

「うん。ただ、ねる前に イエス様と お話しただけなの。」そう 言って、ドラは お母さんを だきしめて キスすると、毛布の 下にもぐりこみました。

「お休み、ドラ。あなたの 口から そんな ことが 聞けるなんて、うれしいわ。それに、とても 元気そうだし。」そう 言って、ドラの お母さんは 部屋を 出て行きました。

ドラは 部屋の 電気を 消して、祈りました。

「イエス様。わたし、あの 庭園と バラの 花について、もっと 知りたいんです。どうか、教えてください！」

（あの 夢は、夕べ ねる前に イエス様に 聞いた 質問と 関係が あるのかも しれないわ。もしかしたら、どうして 最近 みじめな 気分なのか、その 答えが あの 夢にあるのかも。）

ドラは祈りました。「イエス様、どうか、あの夢がわたしの質問とどう関係があるのか、分かりますように！ お願いします！」

すると、心の中で またもや、あの なぞの 声が 聞こえました。「この庭園は、君の心の庭なんだ。君の心の庭…心の庭…」 声は だんだんと 小さくなり、ドラも ぐっすり ねむってしまいました。そして、気が ついたら、また あの庭園に いたのです。ドラは わくわくしました。

（今度こそ、この庭園の なぞを 全部 つきとめよう！）
ドラは 興奮しました。そして、ねむりに つく 前に あの 声が 言ったことを 思い出して、首を かしげました。（この庭園は、わたしの心の庭ですって？・・・バラの花に 聞かなくちゃ！）

ドラは バラの しげみに 走り寄って、出しぬけに 言いました。「ここが わたしの心の庭だって、どういう意味なの？ 教えてください！ わたし、知りたいの！」

「こんにちは、ドラ！ また 会えて、うれしいわ。元気？」

「ええ、元気よ。」ドラは 落ち着かない 様子で 返事を しましたが、バラは しばらく だまっていた。それで ドラは、自分が バラに あいさつさえ しなかった ことに 気が つきました。「あら、ごめんなさい。わたし、いきなり ここに おしかけて 来ちゃったわね。この庭園について、もっと 知りたくなくて、おせっかちになっただわ。あいさつも しなくて、ごめんなさいね！ 今日 は 元気？」

「あなたが 周りの 雑草を ぬいてくれてから、前より ずっと 元気になったわ。」と バラが 答えました。

「よかったら、もっと 教えてもらえないかしら？ お願い。」



バラが 言いました。「まあ、ていねいに 頼めるようになったのね。もちろん、喜んで 教えてあげるわ。」

ドラは バラの しげみの そばにある ベンチに すわると、期待の 目で バラを 見ました。バラが 話し始めました。「あなたは、とても みじめな 気分だったわね。それで、どうしてなのか、イエス様に 聞いたのよね？」

ドラは うなずきました。

「自分の心の庭の状態がわかるように、イエス様は あなたを ここに 来させてくださったの。毎日の暮らしで、どこを 直せば いいのかを 学べば、周りの 人たちも また、あなたの そばに いて 楽しいと 思うようになるわ。」

まるで、ドラの^{こころ}心の^{なか}中の^あ明かりが ついたかのようにでした。「つまり、わたしが^{にわ}庭をきれいにすれば、^{まわ}周りの^{ひと}人たちも、^{まえ}前みたいに わたしと いっしょに いたがるように なるって ことなの？」

バラは ほほえみました。「だんだん ^わ分かってきたよね。雑草を ^{ざっ そう なん ほん}何本か ^{ゆう}ぬいたから、夕べは ^よ良い ^きスタートを ^{かあ}切ったわ。お母さんにお休みの ^{やす}キスをして、^いぐずぐず ^{はい}言わずに ^いベッドに ^{はい}入ったから、お母さんは ^{かあ}びっくりして ^{よろこ}喜んでいたものね。」

ドラには もう一つ、^{ひと}分からないことが ^わありました。「^{ざっ そう}だけど、雑草を ^{とき}ぬいた時、^{とき}どうして ^いいたかったのかしら？」

「そうね。^{ざっ そう}雑草を ^{とき}ぬく時、^{つち}土も ^{いっしょに}くずれて ^{くつついて}きたでしょう？」

ドラは うなずきました。

「^{まい にち}毎日の ^く暮らしから ^{ざっ そう}雑草を ^{ぬく}のも ^{それと}似ていて、^{じ ぶん}自分にとっても ^{たい へん}大変な ことなのよ。」

ドラは ^{ふか}深く ^{かんが}考えながら ^い言いました。「^{なん}何だか ^わ分かってきたような ^き気が ^{する}わ。つまり、^{ざっ そう}雑草とは……」

「……例えば、^{まわ}周りの ^{ひと}人たちに ^{たい}対する ^{おも}思いやりの ^{かんが}ない ^{かた}考え方や ^{おこな}行いなんかね。」と、バラが ^い言いました。「^いそのような ^{わる}悪い ^{おも}思いや ^{おこな}行いを ^{なお}直していけば、^{ざっ そう}雑草は ^き消えて、^{あなた}あなたの ^{てい えん}庭園は ^{また}きれいに ^{なる}わ。」

ドラは ^あ荒れた ^{てい えん}庭園を ^み見渡して、^{かお}顔を ^{くもら}せました。

「^{たい へん}大変だわ。一体 ^{いっ たい}どうしたら、^{そんな}ことが ^{できる}かしら？ ^{やる}ことが ^{おお す}多過ぎて、^{えい えん}永遠に ^{かか}って ^{しま}いそうだわ！」

「まあまあ、^{しん ばい}心配は ^ご無用よ。一人^{ひとり}だけで ^{やら}なくても ^{いい}の。あなたの ^{さい こう}最高の ^{とも}友だちに ^{ねが}お願い ^{すれば} ^{いい}のよ。……」バラはドラを ^いなぐさめるように ^い言いました。

ジリリン！ ドラは、ハッと ^{め ざ}目覚めると ^{うえ}ベッドの ^み上に ^お身を ^{め ざ}起こし、^{ど けい}目覚まし時計の ^{ボタン}を押しました。それから ^{あたま}プルプルと ^{いほ}頭を ^{かんが}ふって、^{いま}今までの ^{こと}を ^{おも}考えました。^だ(そうだ、^{思い出}出した。わたし、^{てい えん}庭園に ^いいたんだわ……。それで、^{なに}何を ^{する}んだったっけ。そうそう、^{ざっ そう}雑草を ^ぬいて、^{てい えん}庭園を ^{きれ}いに ^{する}んだったわ。^{だけ}けど、^{いっ たい}一体 ^{どう}すれば……。)



ふとドラは、バラが、ドラの 最高の 友だちについて 話していた ことを 思い出しました。(つまり、イエス様に たずねるっていう 意味ね。) それで ドラは 祈りました。「イエス様、どうか、今日、わたしが 庭園を きれいに するのを 助けてください。周りの 人たちに 対して 思いやりを 持ち、明るく ふるまえますように。」

祈り終わると、ある 考えが 浮かびました。すぐに 自分の ベッドを きちんと 直して 部屋を そうじしよう、と 思ったのです。いつもは お母さんが 来て 言われるまで しないばかりか、言われても すぐに しない ことが しょっちゅう ありましたから。ドラは、すぐに 部屋を 片付け 始めました。そして、お母さんが 階段を 上がってくる 足音が したところには、部屋は とても きれいに なっていました。

「さあさ、ドラ。早くしないと、朝ご飯を 食べる 時間が・・・」お母さんは そう 言いかけて から、きちんと 片付いた 部屋を 見て、あっけにとられてしまいました。

「まあ、部屋を 片付けたのね! おどろいたわ。きれいじゃ ないの!」お母さんは 大きな 声で 言いました。

「だって、お母さんが 大好きだから。」ドラは お母さんを だきしめて キスしました。

(わあ、これって 楽しいわ。)とドラは 思いました。

丸 1 日中、ドラは 周りの 人たちを 喜ばすことを 考えました。そして、みんなが 今朝の お母さんのように、びっくりするのを見るのが 楽しくて 仕方ありませんでした。しばらくしてドラは、人に 親切に したり 明るく ふるまうことで、周りの 人たちが どんなに 変わるか、考え始めました。(自分の 行いが 良いか 悪いかで、周りの 人たちに どんなに 影響していたかなんて、今まで きが つかなかったわ。)

その夜、ドラは 昨夜よりも もっと 早く、ねる 支度を しました。今日の 良い 行いで、あの 庭が どんなふうになっただかを見るのが 待ち切れなかったのです。ドラは ベッドに 入って 目を ぎゅっと つぶつて、一生けん命 ねようとしたんですが、どんなに がんばっても ねむれません。すると、また 例の なぞの 声が 聞こえてきました。「また 庭園に 行きたければ、イエス様が 連れて 行ってくれるよ。ただ、お願いすれば いいんだ。」



ドラは すぐに 祈りました。「イエス様、どうか、あの 庭に 連れて行ってください。お願いします!」

その時です、ドラは おだやかな 気分^{きぶん}に 包^{つつ}まれました。何^{なん}だか 前^{ぜん}後^ごに やさしく ゆられているような 気^きが します。心^{こころ}が 落^おち着^ついてきて、ドラは 目^めをつぶりました。また 目^めを 開^あけてみると、ドラは 庭園^{ていえん}の すみに ある プランコに 乗^のっていました。真^まん前^{まえ}には、バラの しげみ^{まへ}が あります。

「こんにちは、ドラ!」

ドラが 顔^{かお}を 上^あげると、バラが 葉^はっぱを ふって 手招^{てまね}きしています。「こんにちは!」

「見て! わたしの 周り^{まわ}の 雑草^{ざっそう}が 全部^{ぜんぶ} なくな^なったの! 本当^{ほんとう}に うれしいわ!」と バラが 言^いいました。

ドラは、思^{おも}わず ほほえみ^{ほほえみ}ました。本当^{ほんとう}に、バラの しげみ^{まへ}の 周り^{まわ}には、もう 雑草^{ざっそう}が 全然^{ぜんぜん} ありませ^ない。けれども 庭園^{ていえん}を 見渡^{みわた}してみると、そのほか^{ほか}の 場所^{ばしょ}は、まだ 以前^{いぜん}と 同^{おな}じです。

「いい子^こに していれば、庭園^{ていえん}は 以前^{いぜん}みたい^{みたい}に きれい^{きれい}に なると 思^{おも}ったのに。」ドラは いくぶん がっかりした 様子^{ようす}です。

「まあまあ、元^{げん}気^きを出^だして。庭園^{ていえん}が こんなに ひどくなるのには とても 長^{なが}い 時間^{じかん}が かかったのよ。だから、また 元通^{もとどお}りに きれい^{きれい}に なるのにも、少^{すこ}し 時間^{じかん}が かかるわ。がっかりしないで! ただ、毎^{まい}日^{にち} ちょっとずつ 前^{ぜん}進^{しん}すれば いいのよ。」

「もっと 速^{はや}く きれい^{きれい}に できる 方法^{ほうほう}は ないのかしら?」と ドラ。

「そうねえ……。そう 言^いえば、できる こと^{こと}があるわ。地面^{じめん}は 今^{いま} とても 固^{かた}くなってるから、雑草^{ざっそう}を ぬくのが 大^{たい}変^{へん}でしょう? だから、最^{さい}初^{しよ}に 水^{みず}を まいて、地面^{じめん}を やわらかく すると いいわ。」と バラが 言^いいました。

「わかったわ。でも、お水^{みず}は どこから 持^もってくるの? ふん水^{すい}は 干^ひ上が^あってるし。」と ドラ。

「一番^{いちばん} いい 場所^{ばしょ}は、水源地^{すいげんち}。つまり、神様^{かみさま}の み言葉^{ことば}よ。」と バラが 答^{こた}えました。

「神様^{かみさま}の み言葉^{ことば}に 水^{みず}があるの?」ドラは、首^{くび}を かしげて たずねました。

「ええ そうよ、ドラ。覚^{おぼ}えてる? こ^ここは、あな^{あな}たの 心^{こころ}の 庭^{にわ}なのよ。だから、あな^{あな}たの 心^{こころ}の 地面^{じめん}を やわらかく できる 水^{みず}は、神様^{かみさま}の み言葉^{ことば}の 水^{みず}しか ないの。



まいにち かみさまのことば みずのこころ
毎日 神様の み言葉の 水を やれば、心は やわらかくなって、
あの みにくい 雑草を めくのが もっと かんたんになるわ。それに、
み言葉の 水は、草花も 生き返らせてくれるのよ！」

「てんから あめが ふり、ゆきが おちて また かえらず、ちを
うるおして 物を 生えさせ、めを だして、種まく 者に
たねを 与え、食べる 者に かてを 与える。」

このように、わが口から 出る 言葉も、むなく わたしに
かえり 帰らない。わたしの 喜びと ころの ことを なし、
わたしが 命じ 送った 事を 果たす。」(口語訳聖書、
イザヤ書 55:10-11)

お父さんと お母さんが 初めて 子供向けの 聖書を買ってくれた
時には、毎晩 ねる 前に それを 読むのが 楽しみだったものです。
お父さんと いっしょに 聖書の 映画を 見るのが 楽しかったことを
思い出すと、ドラは 思わず ほほえみました。けれども、最後に
お父さんが 自分と いっしょに 聖書の 映画を 見ようとした 時には
ふくれっ面をしたことを 思って、ドラは また 悲しくなっていました。

今 この 庭園を 見渡してみると、確かに 毎日の 生活に み言葉の
「水」が 欠けていたことが 分かります。けれども ドラには、再び
かみさまの み言葉を 勉強したいという 新たな 願いが わいてきました。
そんなことを 考えていたら、いつの間にか、ドラは 自分の ベッドに
いることに 気が付きました。

時計を見ると、お母さんが 朝食によびに 来るまでには、まだ
少し 時間があります。(よかった！ すぐに 水を見つけないちゃ。)
ドラは ベッドから 飛び起きました。



とだなの した 段に、聖書が入っているのが 見つかりました。すぐそばに、以前 お母さんと いっしょに 暗記した 聖書の
せつが 書いてある ノートも あります。(助かるわ。部屋を そうじしながら、これをおさらいできるもの！)

「み言葉は、わたしに 喜びとなり、心の 楽しみとなりました。」¹ (ああ、そういう 意味だったんだ。神様の み言葉が、
わたしに 喜びを もたらしてくれるのね！)

ドラは 服を 着がえて ベッドを きちんと 整え、部屋を 片付けながら、賛美歌を
歌い始めました。そこへ お母さんが 朝食に 呼びに 来ましたが、ドラが 起きて
着がえているばかりか、元気に 歌いながら おどり回っているのを見て、びっくりしました。

「まあ、おはよう、ドラ。今朝は とても 元気そうね！」

ドラはおどるのを 止めて 言いました。「おはよう、お母さん。わたしね、前に
お母さんと いっしょに 暗記した 聖句を おさらいすることに したの。」

すると お母さんは ますます 感心して 言いました。「それは すばらしいわ、ドラ。
確かに、それは 1 日を 始めるのには、最高の 方法のようね！」

「本当に そうだわ！」とドラ。

「ねえ、お母さん。また いつか、前みたいに 聖書の 物語を いっしょに
読みましょう。」

「そうね！ ぜひ そうしましょう。・・・さあさ、早く 朝食を 食べないと、
おくれちゃうわよ！」お母さんは いたずらっぽく ドラの 鼻を ちよんと つまみました。

ドラは 丸 1 日中、今朝 読んだことを どうやったら 実行に 移せるだろうかと
考えていました。ほかの 人に対して 不親切な ことを しそうに なったり、意地悪な

ことや 不平を 言いそうに なるたびに、今朝 おさらいした 聖句を 思い出しました。
「わたしたちは たがいに 愛し合おうでは ないか。愛は、神から 出たものなので ある。」²
ドラは それを 何度も 自分に 言い聞かせ、代わりに、やさしくて 親切な 言葉を
言おうとしました。

それには かなりの 努力が 要りました。いつも 不平を 言うのに 慣れっこに なって
しまっていたからです。けれども、それが むずかしくて、前のように つい 不平を 言って
しまったりしても、時間が たつうちに、少しずつ よくなってきました。

その夜、ドラと お母さんは ベッドに すわって、いっしょに 新訳聖書の 物語を
読みました。イエス様が 奇跡を 起こす お話や、人々を 助けたりする お話を、
このようにして また 聞くのは 楽しいものでした。

物語を 読み終わると、ドラは 言いました。「お母さん、わたし、イエス様みたいに
なりたいわ。みんなに 愛を あげて、お手伝いになることを したいの。」

「まあ、ドラ。本当に やさしいのね。とても 立派よ！」 そう 言うと、お母さんは
ドラを だきしめて キスしました。

ドラは その夜、ベッドに 入って、お母さんの 言ったことを 考えていました。目を
つぶると、満たされた 気持ちに なりました。自分が 変わりつつ あると 分かったからです。
まもなく すると、ドラは ぐっすりと ねむっていました。

² 口語訳聖書、ヨハネの第一の手紙 4:7

目を開けると、ドラはまた庭園内の通り道をスキップして
いました。石の間に生えていた大きな雑草は、なくなっています。
よく見ると、石は青紫色をしていました。ドラの大好きな色です。

「まあ、何てきれいな色なのかしら。」バラのしげみの前に
立って、ドラは思わずつぶやきました。すると、バラの花が言
いました。

「まだ残っている雑草の下にかくされている宝物を見つけたら、
きっとおどろくわよ。それに、ねえ、見て。ふん水に水がもどつて
きたわ！」バラはうれしそうです。

ドラがふん水の方を見ると、水が四方八方に向かってふき
上げています。それがあちこちにはねて、まるで水がおどっている
ようです。本当にきれいでした。

「うわあ。最初に見た時は、こんなにきれいなふん水だとは、
夢にも思わなかったわ！」ドラはこの美しいながめに圧倒され
ました。そして、あと何をしなければならぬかと、庭園を見渡
しました。（ベンチはぬり直す必要があるわね。こわれたさくも
直さないと。雑草も、まだちらほらと残っているわ。

ドラはバラの方に向き直って言いました。「ねえ、教えて
くれない？ 庭園の残りを全部きれいにするのに一番いい
方法は何か？ ほかの宝物を見たくてたまらないの！」

「そうねえ・・・。」バラは、葉っぱの手をあごらしき所に
あてて言いました。「あなたは、前よりも親切でやさしくなったわ。
それに、み言葉も読んでいるし・・・。そうだ！ 例の『声』に
聞いたらいいわ！」バラは得意満面で言いました。



ドラはびっくりした様子です。「わたしに話しかけてくる、あの『声』を知っているの？」

バラは、ほほえみながらうなずきました。「ええ、もちろんよ、ドラ。それについては何でも知ってるわ。だって、その『声』とわたしは、親友なんだから。」

その時です。ドラは ハッと 目を 覚まして ベッドの 上に 身を 起こしました。
またもや 目覚まし時計に 起こされて、ドラは 自分の 部屋の ベッドに もどって
いました。早 朝の 日光が 窓から 差しこんでいます。(あ〜あ。あの『声』が
一体 どこから 来るのかを 聞くのに、丸 1 日も 待たなくちゃ いけないなんて。
もう ちょっとで 分かる ところだったのになあ!) ドラは 不きげんそうな 顔で
すわっていました。

「元氣を出して。がまん、がまん。」と、例の『声』がドラの 心の中 で
ささやきました。

「わかったわ。」ドラは うなずいて ベッドから 出ました。そんな 気分でも なくても、
とにかく 元氣に ふるまおうと 決めました。そして、バラが、何を したら いいかを
その『声』に たずねたら いいと 言った ことを 思い出しました。すると、あの
『声』が また 聞こえてきました。「静かに して 耳を かたむけるなら、君の 心の
中に ささやいてあげるからね。」

ということで、ドラは そうしたのです。あの『声』が 教えてくれる ことを 聞き
出すために、1 日中 耳を かたむけていました。それで 丸 1 日、ほかの
人に対して やさしく 親切に してあげたり、助けを 必要としている 人を 手伝って
あげたり、つらい 思いをしている 人にはげましの 声を かけてあげたりする
機会を たくさん 見つけることが できました。『声』が いつも、やさしくて
はげみに 満ちた 方法を 教えてくれたからです。

1 日は あっという間に 過ぎ、ドラが ベッドの 中に 入っていると、お母さんが
お休みの キスを しに 来ました。

「すてきな 夢を見てね。お休み、ドラ!」 お母さんが やさしく 言いました。ドラは
うれしそうに クスクス 笑いました。(もちろん、今夜も すてきな 夢を見るわ。とっても
すてきなのをね!) 目を つぶると 次の しゅんかん、ドラは バラの しげみの 真ん前に
立っていました。

バラは につこり ほほえむと、以前 古くて さびた ブランコが あった 方を 指して 言い
ました。「あちを 見てごらんなさい。」ドラが 振り向くと、古い ブランコは もう ありません。
その 代わりに、きれいな クッションと 屋根の ついた、新しい ブランコが ありました。

すぐに、ドラの 目は ブランコに すわっている 男の 人に 引き寄せられました。
ものすごく やさしそうな 目で、すてきな ほほえみを 浮かべています。

その 人は こちらに 手を 差し出して、ドラの 名前を 呼びました。ドラは 胸が
いっぱいになって、ゆつくりと 歩み寄りました。ドラも 手を 差し出しましたが、言葉が
出ません。やっとの ことで、ドラは ささやきました。「あの『声』・・・あの 声は、
イエス様だったんですね?」

その 人は ドラの 手を 取って 言いました。「そうだよ、ドラ。わたしだ。さあ、わたしの
となりに おすわり。君が 話したいことを、何でも 話して いいよ。最高の 友だちとして、
わたしは いつも 君の そばに いて、君の 助けになり、君を 幸せにしたいんだ。」

「ああ、イエス様！」ドラには、それしか 言えませんでした。ドラは イエス様を
だきしめました。

「ドラ、君の 庭園を見てごらんよ。」イエス様は 目を 輝かせながら 言いました。

見渡してみると、雑草は 全部 なくなって、きれいに なっています。ドラは
うれしくなりました。さくも 直されているし、ベンチも ぬり直されています。それに、
以前 雑草で いっぱいになっていた 花だんも、今では あらゆる 種類と 色の
新しい 花が さき乱れています。

「うわあ！ 何て きれいなのかしら！ 本当に ありがとうございます！ イエス様が、
こんなに すてきに してくださったんですね？」ドラは 声を 大にして 言いました。

「どうして 分かったんだい？」ドラが おどろきで わくわくしているのを見て、イエス様は
目を 輝かせながら ほほえみました。

「だって、あっという間に こんなに きれいに するなんて、わたしには 絶対に
無理なもの。」とドラは 答えました。

「そうだね。わたしが 話しかけた 時、君はその声に 従ってくれたから、わたしは
うれくなって、君のために ここを きれいに したんだ。このまま きれいに 保つためには、
毎日 きちんと 水をやり、雑草を ぬき、そうじなくては いけないよ。そして、助けが
必要な 時には いつでも、わたしを 呼んでおくれ。」

「そうします、イエス様。約束します。」そう 言って、ドラは イエス様の 肩に 頭を
もたせかけました。生まれてこのかた、まるで 天国に いるみたいに、こんなに 幸せに
感じたことは ありませんでした。

すると、イエス様が 言いました。「お話を してあげようか？」ドラは じっとしたまま、ただ
うなずきました。イエス様は 話し始めました。「あるところに、庭園が あったんだ・・・。」



「あなたがたは、わたしが 語った 言葉によって
すでに きよく されている。」（口語訳聖書、
ヨハネによる福音書 15:3）

